小田原の遺跡探訪シリーズ 15

小田原城総構

―戦国最大級の城郭―

小田原市教育委員会

例　　言

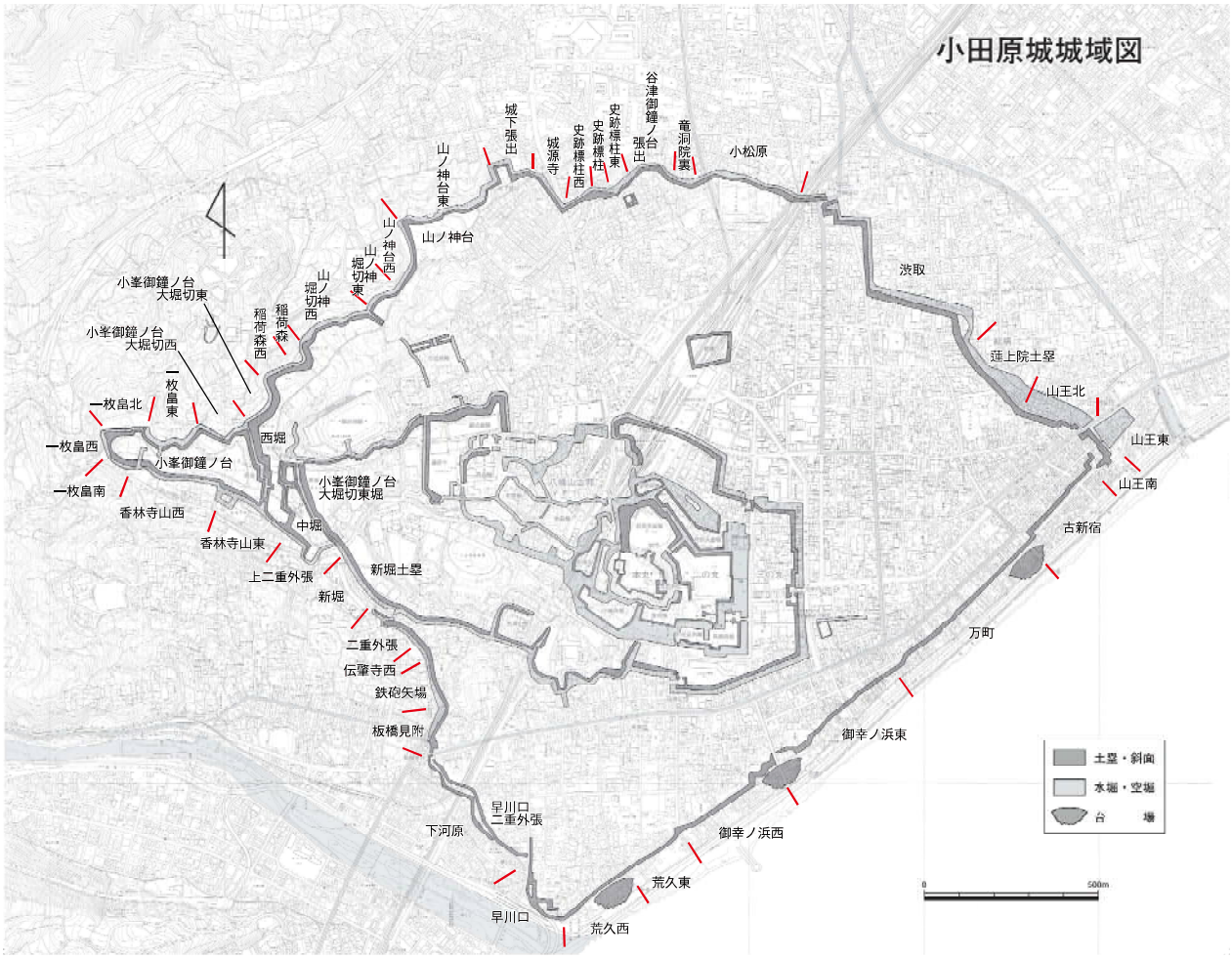
1　本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」として作成しました。今回は第15号として、小田原城総構を中心に取り上げました。

2　本書の刊行は、令和元年度（2019年度）国庫補助事業である「地域の特性ある埋蔵文化財活用事業」の一環として行いました。

3　本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）

戸田哲也・相原俊夫（株式会社玉川文化財研究所）、神奈川県教育委員会、大貫みあき、小田原城総合管理事務所、有限会社 石橋印刷

4　本書は、小田原市文化部文化財課　土屋了介が担当者となり作成しました。同課高橋万明・山口剛志・野尻夏姫・吉野文彬・内田文明・田村直美・鈴木剛進・峯田達也・下澤亜裕美・土屋健作・佐野忠史・市毛秀人・北條ゆうこ・山口由美子、文化部大島慎一が補佐しました。



第１図　小田原城城域図（1/30,000）

［表 紙］文久図（小田原城天守閣蔵）

［裏表紙］小田原城総構のイメージ図（画 市毛秀人）

Ⅰ　小田原城総構の立地と発掘調査

1　小田原城総構の立地

本書では、小田原城総構について、発掘調査で発見された遺構を中心に紹介します。

天正18年（1590年）、豊臣秀吉による小田原攻めが行われ、約16万の軍勢が小田原城を包囲します。これに対して小田原城の城主であった戦国大名の小田原北条氏（以下、北条氏）は、対立の深まる秀吉の来攻に備え、自然の地形を巧みに活かしながら、水平距離で周囲９kmにも及ぶ総構を築いていました。堀と土塁から成る総構構築は城内への侵入を阻む防御施設として効果的であり、豊臣秀吉も力攻めによって小田原城を落とすことはできませんでした。

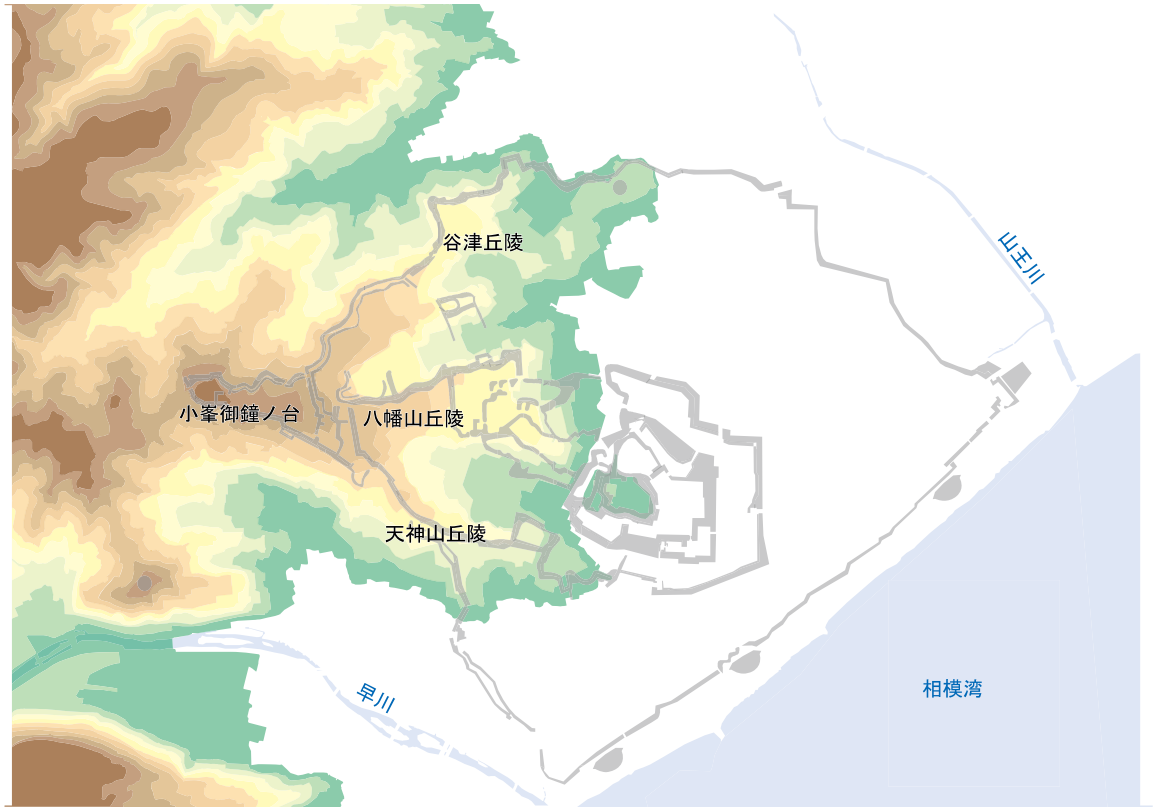
北条氏の築いた総構は箱根の山から続く丘陵や河川、海岸といった自然地形上、重要な箇所を取り込む形となっています。このため、城下も取り込むこととなり、戦国時代最大級の城郭となりました。広大であり、丘陵部の総構と低地部の総構とでは構造等に違いが認められるほか、総構普請以前から存在した三の丸外郭と複合して防衛線を形作っています。

箱根火山から続く尾根は、小峯御鐘ノ台の標高123.8mが周辺におけるピークを形成しており、小峯御鐘ノ台から低地部へ向け傾斜していく地形となっています。また、この尾根は城山公園の西側で、北東側へ延びる谷津丘陵、県立小田原高校や小田原城址公園方面へ延びる東側の八幡山丘陵、南側の天神山丘陵という３方向に枝分かれしています。

丘陵部の総構は、この谷津丘陵及び天神山丘陵上に築かれました。３つの丘陵の分岐点には大堀切が３条設けられ、尾根が入念に分断されています。東へ延びる中央の八幡山丘陵上には八幡山古郭や近世本丸・二の丸が設けられており、総構によって周辺での最高所である小峯御鐘ノ台を確保しつつ、大堀切によって丘陵を分断することで八幡山古郭や本丸を攻められにくい構造とする意図が読み取れます。

谷津丘陵上の総構は、本丸から見て北西にあたる山王口へ向かい緩やかに下っていき、標高10m前後の沖積低地部の総構と接続し、今は暗渠となっている渋取川といった河川や湿地を堀として利用する形へ変化していきます。

天神山丘陵上の総構は、三の丸外郭新堀土塁と組み合わさりながら、板橋口まで下っていきます。その途中には虎口が開かれ、堀と土塁が二重になる二重外張が認め



年代	時代	主な出来事	市内の遺跡と本書で紹介する事柄など
五〇〇〇〇年前	旧石器時代	箱根新規軽石流噴出及び東京軽石層降下	
三八〇〇〇年前		台形様石器や局部磨製石斧が使用される	八幡山古郭本曲輪第Ⅲ地点
		細石刃が日本列島全体に広まる	谷津山神遺跡
一六〇〇〇年前	縄文時代 草創期	土器・土偶・石鏃の使用が始まる	天神山台遺跡
一二〇〇〇年前	早期	最終氷期を終える。定住的な生活へ移行。漆の利用	八幡山遺構群
七〇〇〇年前	前期	気候温暖化により海面が上昇（縄文海進）	羽根尾貝塚
五五〇〇年前	中期	東日本で環状集落が発達する。土偶激増	久野一本松遺跡
四五〇〇年前	後期	作業場、墓地、祭祀場の独立化。再葬墓の増加。	御組長屋遺跡
三三〇〇年前	晩期	晩期後葉、北部九州に水稲耕作が伝わる（弥生早期）	前川山王前遺跡
二八〇〇年前	弥生時代 前期	御殿場泥流による足柄平野の景観一変	前川向原遺跡
二四〇〇年前	中期	鉄器や青銅器の使用が始まる	中里遺跡
五七	後期	奴国王、後漢光武帝より金印を受ける	千代南原遺跡
二三九		卑弥呼が魏に使いを送る	千代吉添遺跡
四二一	古墳時代 前期	巨大前方後円墳築造開始	八幡山遺構群
五二七	中期	倭の五王の時代が始まる	久野下馬下遺跡
五五二	後期	磐井の乱	久野古墳群
六四五		仏教公伝	総世寺裏古墳
七〇一	飛鳥時代	乙巳の変。大化の改新始まる。	羽根尾横穴墓
七一〇		大宝律令の完成	千代寺院跡
七九四	古代 奈良時代	平城京へ遷都	永塚北畑遺跡
一一九二	平安時代	平安京へ遷都	下曽我遺跡
一三三六	中世 鎌倉時代	源頼朝、征夷大将軍に任じられる	久野蓮光地遺跡
一三九二	南北朝時代	足利尊氏、建武式目を定め、室町幕府を開く	御組長屋跡
一四六七		足利義満、南北朝を合一	国府津三ツ俣遺跡
一四九三	室町時代	応仁・文明の乱始まる	小田原城三の丸幸田口跡
一五〇〇頃		伊勢宗瑞による伊豆討ち入り	小田原城三の丸北堀
一五六九		伊勢宗瑞、小田原を領有	小田原城三の丸箱根口
一五九〇	安土桃山時代	武田信玄、小田原城を攻め、氏政館に放火	小田原城三の丸外郭
一六〇三		豊臣秀吉の小田原攻め	小田原城総構
一七〇七	近世 江戸時代	徳川家康、江戸幕府を開く	小田原城本丸・二の丸
一八五三		富士山宝永の大噴火	小田原城下関連遺跡
一八六八		ペリー来航	台場造営
一九四五	近・現代	五箇条の誓文の公布、明治改元	小田原城廃城
		太平洋戦争終結	小田原城天守閣復興

第２図　小田原城周辺の地形及び関連年表

られます。板橋口（いたばしぐち）から早川口（はやかわぐち）では土塁が設けられています。

低地部海岸沿いの総構は大部分が開削されており、現在は分かりにくい状況になっていますが、部分的に残る高まりや絵図から、荒久（あらく）から山王口に至る海岸沿いに土塁が設けられたものと考えられます。

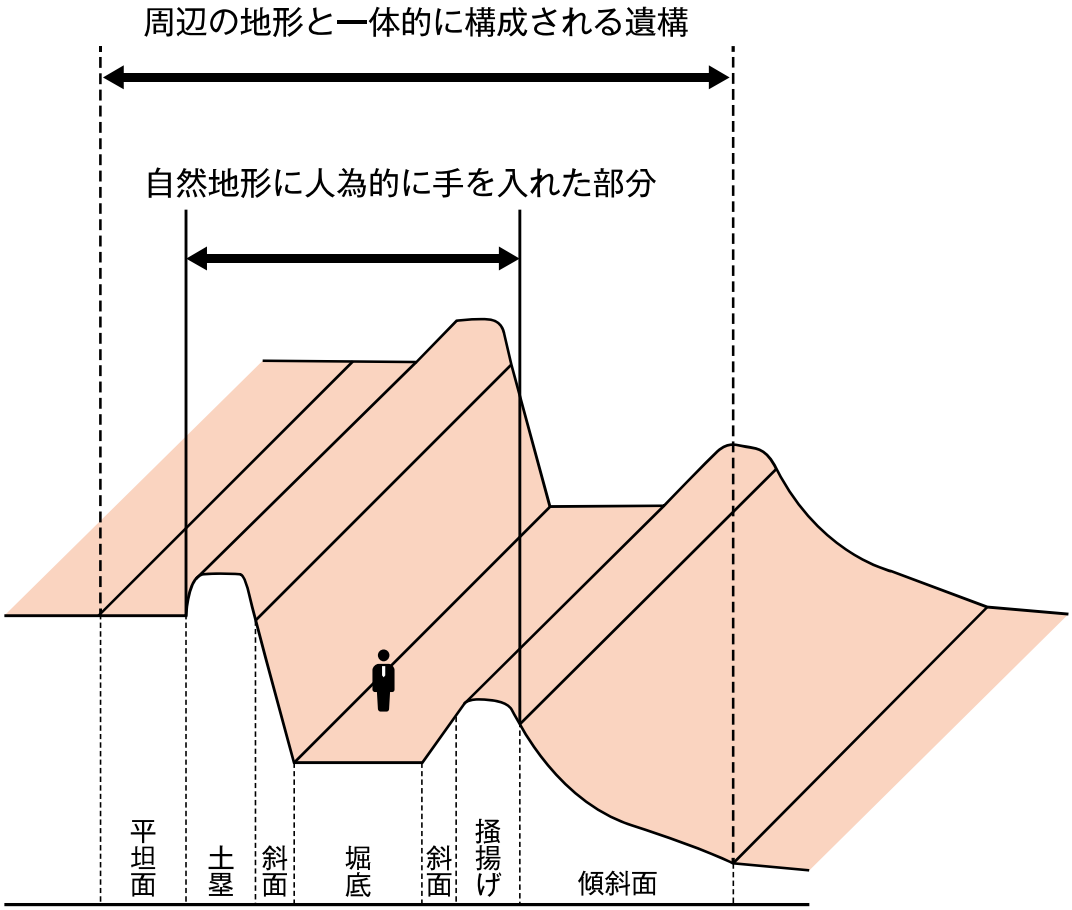
低地部の状況を踏まえると、丘陵部の総構が400年以上もの長きにわたり比較的良好に残されてきたのは非常に驚くべきことです。その背景として、江戸時代に藩によって御留山（おとめやま）とされ、立ち入り禁止となっていたことが挙げられます。これは徳川家光の時代に行われた、江戸の西を守る要害（ようがい）とするための措置ですが、結果として戦国時代の雄大な規模の堀と土塁が残されることとなりました。現在では、堀の法面を中心として、総構の一部が国の史跡に指定され、史跡小田原城跡として保護されています。

写真１　丘陵上に位置する小田原城（東から）

２　小田原城総構の発掘調査

小田原城総構（以下、総構）は、主に丘陵部の総構が遺跡として周知されており、開発等に伴う発掘調査が行われてきました。堀の規模が大きいため、堀を埋める覆土部分のみが確認された調査も多いですが、中には堀の肩や法面、底面が明らかになった調査もあり、文献や絵図から想定されていた総構について、発掘調査から具体的に知ることができるようになってきました。一例として、平成13年に発掘調査が行われた総構伝肇寺西第Ⅰ地点では、幅16.5m、堀底幅6.5m、深さ10mの総構堀が検出され、大規模な堀の形が明らかにされています（山口ほか2004）。

なお、発掘調査地点の名称は、昭和51年策定の『史跡小田原城址保存管理計画策定報告書』（田代ほか1976）で示された地域の字名や遺構の形態を示す形容詞等を用いた名称を基礎に、平成22年に策定された『史跡小田原城跡八幡山古郭・総構保存管理計画策定報告書』で示した名称を用いています（小田原市教育委員会2010）。また、『史跡小田原城址保存管理計画策定報告書』は総構を山地と低地に分け、現況の詳細調査結果を示すなど、今日においても調査の基礎的資料となっています。



第３図　総構遺構構成模式図

さて、総構の本格発掘調査が初めて行われたのは、1983年５～６月実施の総構史跡標柱西第Ⅰ地点で、総構空堀南側法面が確認されました（諏訪間1986）。以後、総構各地点で発掘調査は今日まで続いており、雄大な堀と土塁の具体像が把握されつつあります。まず、総構各所の発掘調査の状況をご紹介します。

写真２　竜洞院裏第Ⅰ地点調査状況（北から）

総構竜洞院裏では1986年に第Ⅰ地点の本格調査が実施され、総構で初めて障子堀が検出されました（諏訪間1988）。障子堀は堀障子をもつ堀を指し、堀障子は堀底から畝状に立ち上がる仕切りを指します。堀障子は保水や堀内での移動を妨げる障害物としての機能をもつものです（小笠原2015）。小田原城の堀障子は土を断面台形状に掘り残して造られたものが多く見られます。総構竜洞院裏の発掘調査によって、小田原城の総構に堀障子が存在することが明確になりました。

総構谷津御鐘ノ台張出では、1994年に第Ⅰ地点の試掘調査で総構堀が確認されたため（神奈川県教育委員会1996）、1995年12月13日～1996年１月12日まで本格調査が実施され、堀障子が確認されました（神奈川県教育委員会1997）。第Ⅱ地点は2000年に立会調査が行われ、障子堀が検出されています（佐々木2001）。

総構史跡標柱西では、上記第Ⅰ地点の調査の後、1997年に第Ⅱ地点が調査され、堀状遺構とテラスが検出されました。これは総構空堀の外側に付随する犬走り状のテラスと想定されました（諏訪間2000）。第Ⅲ地点は1993年に調査され、堀法面が検出されています（佐々木2001）。

総構城源寺では1990年に第Ⅰ地点が調査され、空堀法面が検出されました（塚田1995・佐々木2001）。第Ⅱ地点は2002年に試掘調査が行われ、堀覆土が確認されました（諏訪間2005a）。

総構城下張出では、1983年に第Ⅰ地点の試掘調査（塚田1995・佐々木2001）、1983年に第Ⅱ地点の立会調査が実施されましたが、既に削平を受けており遺構は検出され

ませんでした（佐々木2001）。その後、第Ⅲ地点で1995年に試掘調査が行われ、堀の位置が確認されました（諏訪間1998）。第Ⅳ地点が2007年に試掘調査され、堀法面を確認しています（佐々木2008）。2011年は第Ⅴ地点が調査され、掻揚げと平坦面造成の地業に伴う段切り状遺構が確認されました（渡辺2014）。2014年は第Ⅵ地点で試掘調査が行われ堀覆土が確認されています（山口2015）。

写真３　城下張出から山ノ神台周辺の遠景（北西から）

総構山ノ神台東（やまのかみだいひがし）では2014年に試掘調査が行われ、土塁敷きがローム層まで削平されている状況が確認されました（山口2015）。2016年の試掘調査では土塁状の高まりが残存していることを確認し、東側ほど遺跡の残りが良好であることが分かっています（山口2017）。

山ノ神台（やまのかみだい）では1991年に谷津山神遺跡第Ⅰ地点が調査され、総構内側の平坦部で物見台と考えられる掘立柱建物が確認されています（山口ほか2003）。

総構山ノ神堀切東（やまのかみほりきりひがし）では1994年に調査された第Ⅰ地点で総構の堀法面が検出されました（諏訪間1997）。

小峯御鐘ノ台大堀切西堀（こみねおかねのだいおおほりきりにしぼり）では、1988年に第Ⅰ地点で立会調査が行われ、大堀切にも堀障子があることが確認されました（大島1996）。

小峯御鐘ノ台大堀切中堀（なかぼり）では、1988年に第Ⅰ地点で立会調査が行われ、堀法面と堀底が確認されました（諏訪間1996a）。2009年に試掘調査を行った第Ⅱ地点は、堀法面、土塁が確認されたため、史跡小田原城跡に追加指定され、保存が図られています（諏訪間2010a）。

小峯御鐘ノ台大堀切東堀（ひがしぼり）では、第Ⅰ地点が1990年に調査され、障子、土橋、横矢折れ部分が確認されています（諏訪間1996b）。2015年の試掘調査では土塁、掻揚げ

が確認され、調査の結果を踏まえ、史跡小田原城跡に追加指定されています（山口2015）。

小峯御鐘ノ台では第Ⅰ地点で2002年に試掘調査が実施され、戦国時代の土坑・柱穴群が検出されました（諏訪間2004）。

総構一枚畠北（いちまいばたきた）では1996年に第Ⅰ地点の立会調査が行われ、堀法面が確認されました（佐々木2001）。

総構一枚畠南（いちまいばたみなみ）では1992年に第Ⅰ地点が調査され、総構南側法面と直交する堀が二条確認されました（山口2001a）。

総構香林寺山西（こうりんじやまにし）では２地点で調査が行われ、2002年調査の総構香林寺山西第Ⅰ地点では、試掘調査で総構堀が確認されたため、史跡小田原城跡に追加指定されています（諏訪間2005b）。2009年調査の第Ⅱ地点は、堀、法面、掻揚げの検出を受けて、追加指定されました（諏訪間2010b）。

総構上二重外張（かみふたえとばり）は、堀と土塁が二重に配置された、丘陵部総構の虎口（出入り口）にあたります。1991年に第Ⅰ地点が調査され、その位置と形態が確認されました（山口2001b）。1996年は第Ⅱ地点が調査され、総構堀の東側法面が検出されています（大島2001a）。1997年は第Ⅲ地点が調査され、総構堀の東側法面が検出されました（大島2001b）。

三の丸外郭新堀土塁（さんのまるがいかくしんぼりどるい）では、総構に隣接する箇所で、2010年に試掘調査が実施され、土塁が確認され、史跡小田原城跡として追加指定され、保存と活用が図られています（大島2010）。

三の丸外郭新堀（しんぼり）では、総構と堀を共有する箇所にあたる第Ⅱ地点が1983年に調査され、堀法面が検出されています（塚田1995）。その隣接地である第Ⅸ地点では、2010年に試掘調査が行われ、堀法面と考えられる遺構が検出されています（山口2011）。

総構二重外張（ふたえとばり）では、2009年に第Ⅰ地点の試掘調査が行われ堀覆土が確認されました（大島2010）。2013年は第Ⅱ地点で調査が行われ、堀、堀底、堀障子、水路状施設が検出されています（土屋健作2020）。

総構伝肇寺西（でんじょうじにし）では2001年に第Ⅰ地点が調査され、堀と土塁が共に残存していました。堀と土塁が一体となった姿の検出は、総構としては第Ⅰ地点の調査が初の事例となるものでした。堀は障子堀で、土塁は平坦面を造り出した後、土を積み上げていることが明らかとなりました（山口ほか2004）。

写真４　城下張出第Ⅴ地点　掻揚げ（北西から）

写真５　山ノ神堀切東　堀（北から）

写真６　小峯御鐘ノ台大堀切中堀第Ⅱ地点　堀（北から）

写真７　香林寺山西第Ⅰ地点　障子堀（北から）

写真８　香林寺山西第Ⅱ地点　障子堀（南から）

写真９　上二重外張第Ⅰ地点　堀（北から）

写真10　伝肇寺西第Ⅰ地点　堀障子（北から）

写真11　鉄砲矢場第Ⅰ地点　堀（北から）

総構鉄砲矢場では2003年に第Ⅰ地点が調査され、総構の堀と土塁を検出しています。土塁は平坦面を造り出し、版築して造られていることが明らかとなりました（諏訪間2007）。2004年は第Ⅱ地点が調査され、第Ⅰ地点から続く総構堀と土塁を検出し、土塁が平坦面の造り出しと版築によって造られていることが明らかとなりました（山口2008）。

総構早川口二重外張では2017年に確認調査が行われ、土塁が検出されました。土塁は円礫を積み上げて、その上に版築状に土を盛って造られており、低地部の土塁の構造を示しているものと考えられました（土屋了介2018）。

総構御幸の浜西では、発掘調査は行われていませんが、滄浪閣土塁の現地測量調査と研究が行われ、蓮上院土塁と同形の土塁と評価されています（小笠原2014）。

総構江戸口見附では1999年に試掘調査が行われましたが、遺構は検出されず、調査地はすでに土塁の掘削された土塁敷き内に位置するものと考えられました（大島2001c）。2020年には江戸口見附の南側溜池に相当する箇所の試掘調査で堀覆土が検出されています。

写真12　（参考）小田原城の障子堀（八幡山枝堀）

Ⅱ　丘陵部の総構の調査成果

1　竜洞院裏

総構で、初めて堀底まで調査されたのが、竜洞院裏第Ⅰ地点です。1986年に実施された、この調査では空堀であることと、堀底の形態が障子堀であることが確認されました。堀は上部が削平されていましたが、天端の残存幅は６ｍ、堀底幅3.2ｍ、深さ2.2ｍ、堀法面の勾配50～55度のものでした。堀の確認面の標高は約20ｍです。調査地西側の崖で確認できる堀の幅は10ｍ以上であることが報告され、丘陵頂部から堀底までは15～17ｍと想定されています。遺物は堀底から五輪塔風輪２点と板状石５点が出土しています。

調査の結果、総構の空堀が良好に残っていたため協議を行い、遺構が保存されたことも特筆されます（諏訪間1988）。現地においては、総構内部と外部の標高差が体感でき、総構の堅固さが実感されます。

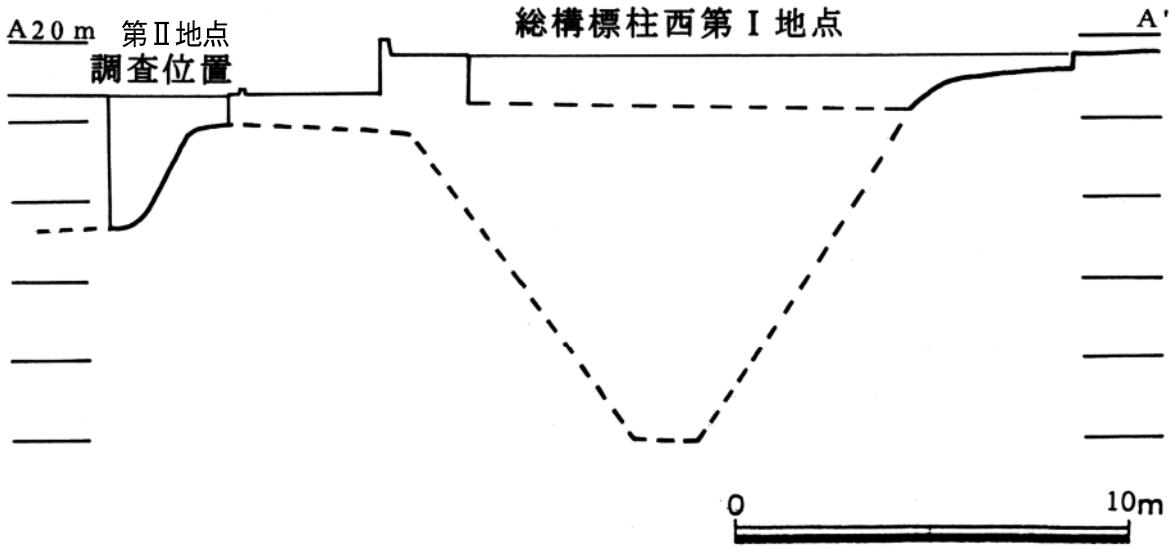
第４図　竜洞院裏第Ⅰ地点位置図

写真13　竜洞院裏第Ⅰ地点　障子堀（北から）

写真14　竜洞院裏第Ⅰ地点　堀（東から）

2　史跡標柱西

竜洞院裏第Ⅰ地点から西に進むと、谷津御鐘ノ台張出（やつおかねのだいはりだし）や史跡標柱を経て史跡標柱西と仮称されている箇所に至ります。史跡標柱西は城の出入り口である虎口（こぐち）の「久野口（くのぐち）」の付近と考えられ



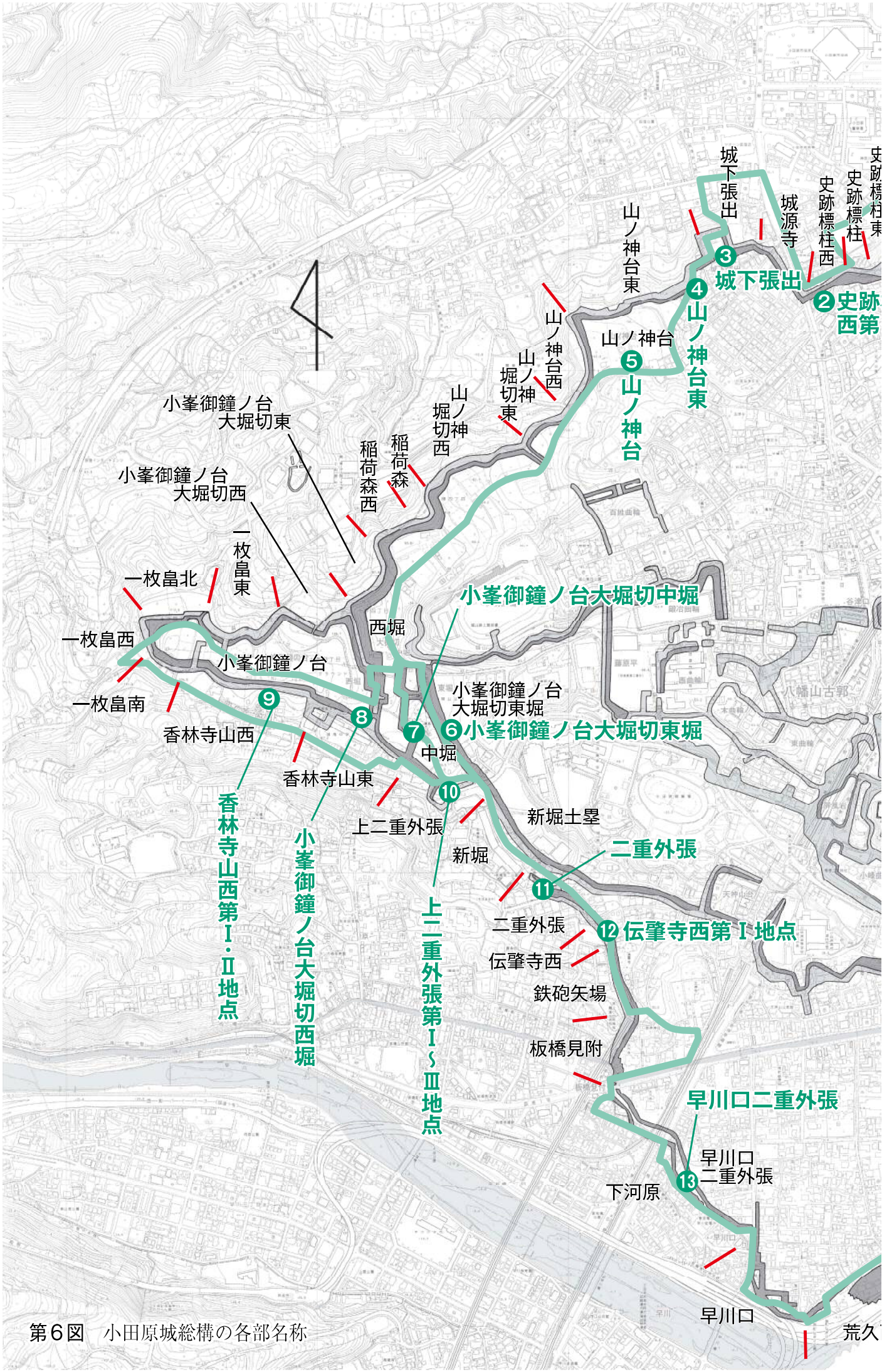
第５図　史跡標柱西遺構断面想定図（1/300）

ています。ここでは２地点が調査され、堀と外側に付随する犬走り状遺構、堀状遺構、堀状遺構法面上の柵列の可能性のある柱穴などが検出され、堀の幅は15～18m前後と考えられています。堀確認面の標高は18.5m前後でした。堀の外側に存在した犬走り状の遺構と外側の堀状遺構は、絵図や現況地形からは想定されていない遺構であり、予想外の発見となりました（諏訪間1986・2000）。

３　城下張出

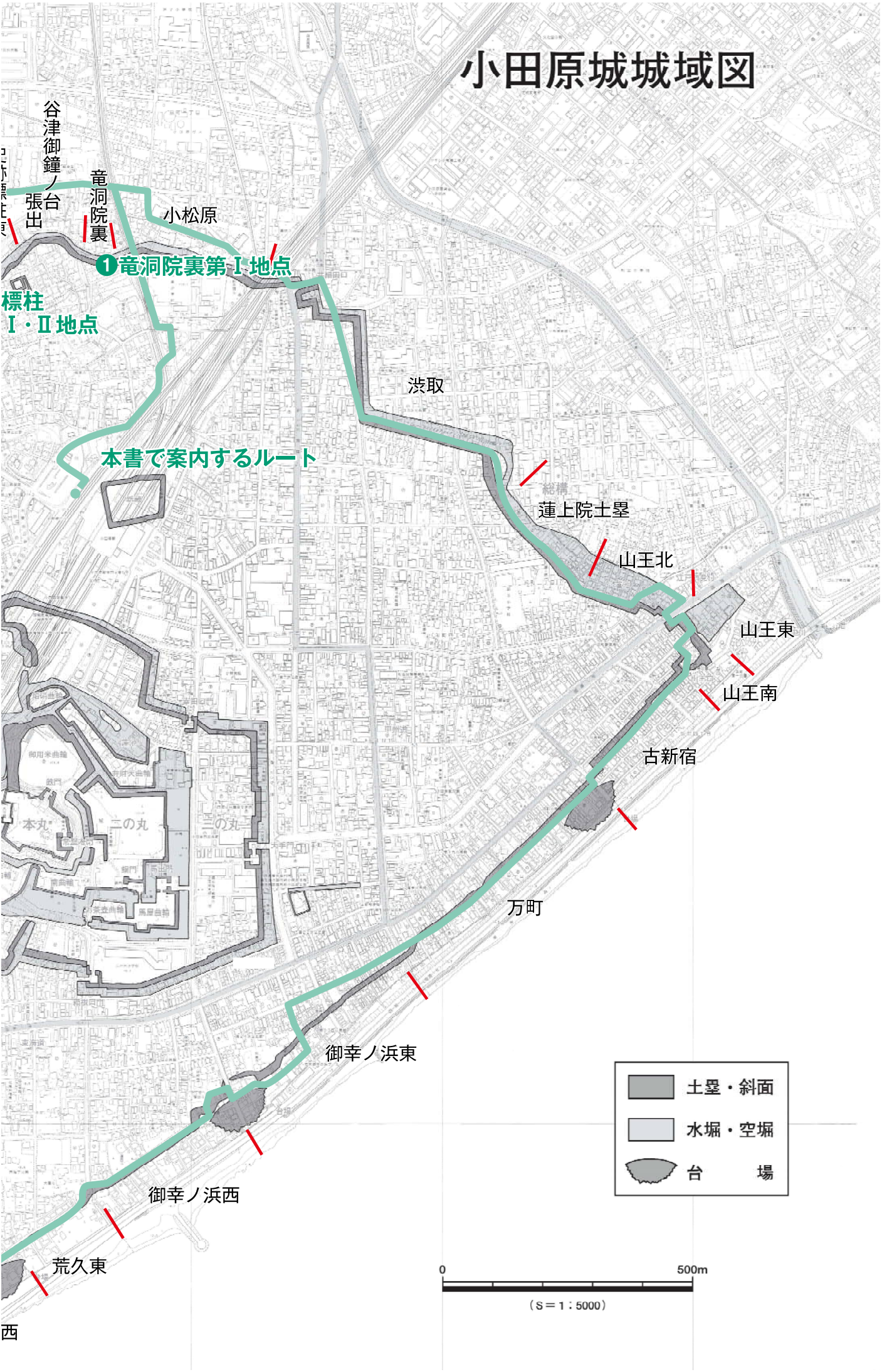
史跡標柱西から城源寺を経て西へ進むと城下張出に至ります。城下張出は標高約41mの総構北端の張り出し部分ですが、現況では宅地化に伴う埋め立てによって、西側ほど遺構の表面観察が難しい状態となっています。東側は堀の形を観察することができます。城下張出ではこれまでに５地点で調査が行われ、堀や掻揚げの位置が把握されています。また、史跡小田原城跡に指定された箇所も多く、公有地化された箇所は開放されています。

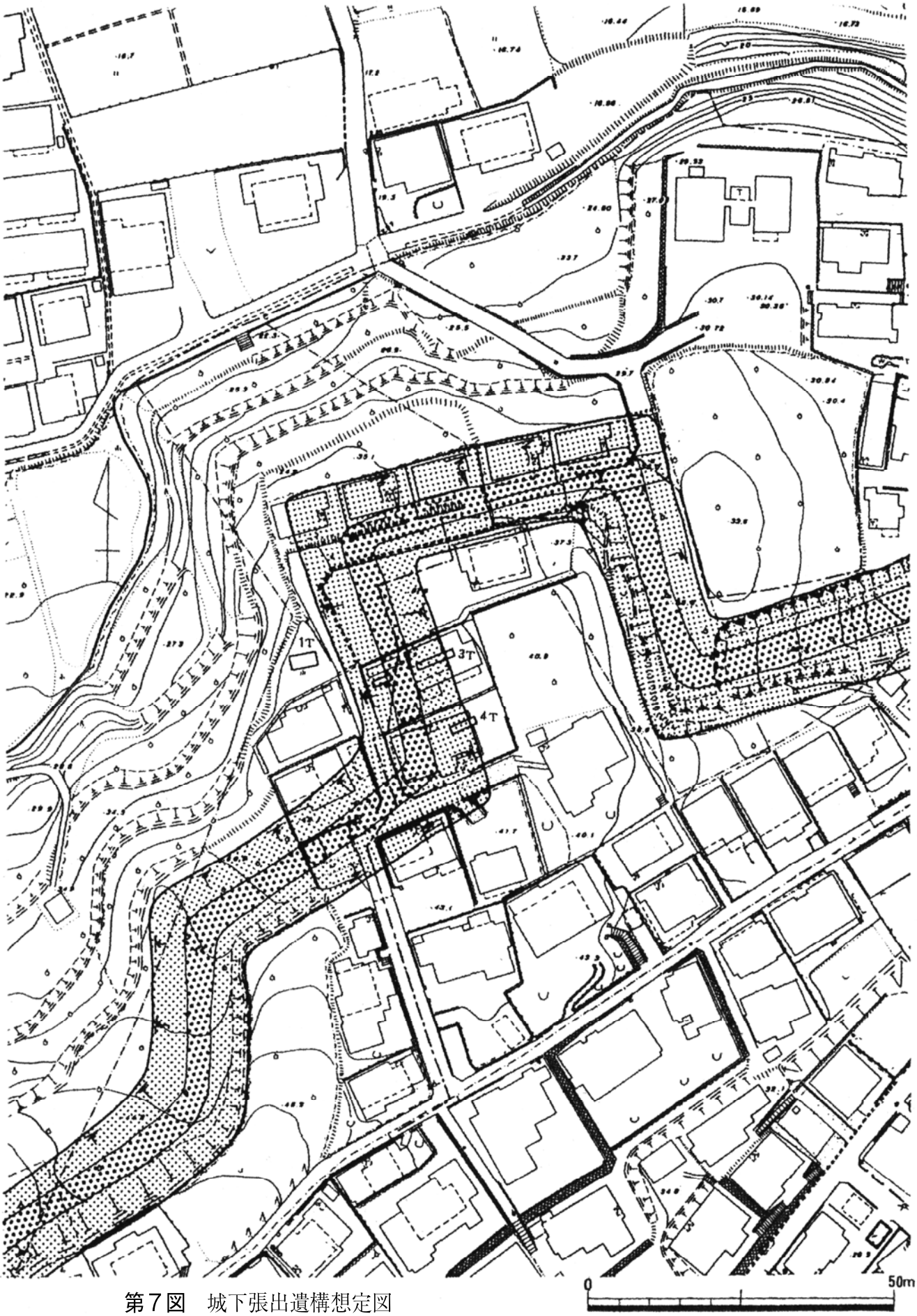
発掘調査によって把握された城下張出は東西15m、南北10m程度の長方形で、周囲に空堀が巡っています。堀法面の勾配は約55度で、堀の幅は15～18m程度であると想定されます。空堀の外側には掻揚げが造られていました。掻揚げは、ロームブロックを主体としており、堀を構築した際の搬出土を盛り土したものであることが理解されます（諏訪間1998）。第Ⅴ地点では掻揚げの盛り土を行う前に段切りして平坦面を造っていることが把握されるなど、発掘調査によって構築方法の一端が明らかにされています（渡辺2014）。



第６図　小田原城総構の各部名称

小田原城城域図


谷津御鐘ノ台張出
竜洞院裏
小松原
❶竜洞院裏第Ⅰ地点
標柱Ⅰ・Ⅱ地点
渋取
本書で案内するルート
蓮上院土塁
山王北
山王東
山王南
古新宿
万町
御幸ノ浜東
御幸ノ浜西
荒久東
本丸
二の丸
三の丸
土塁・斜面
水堀・空堀
台　場
0
500m
（S＝1：5000）



第７図　城下張出遺構想定図

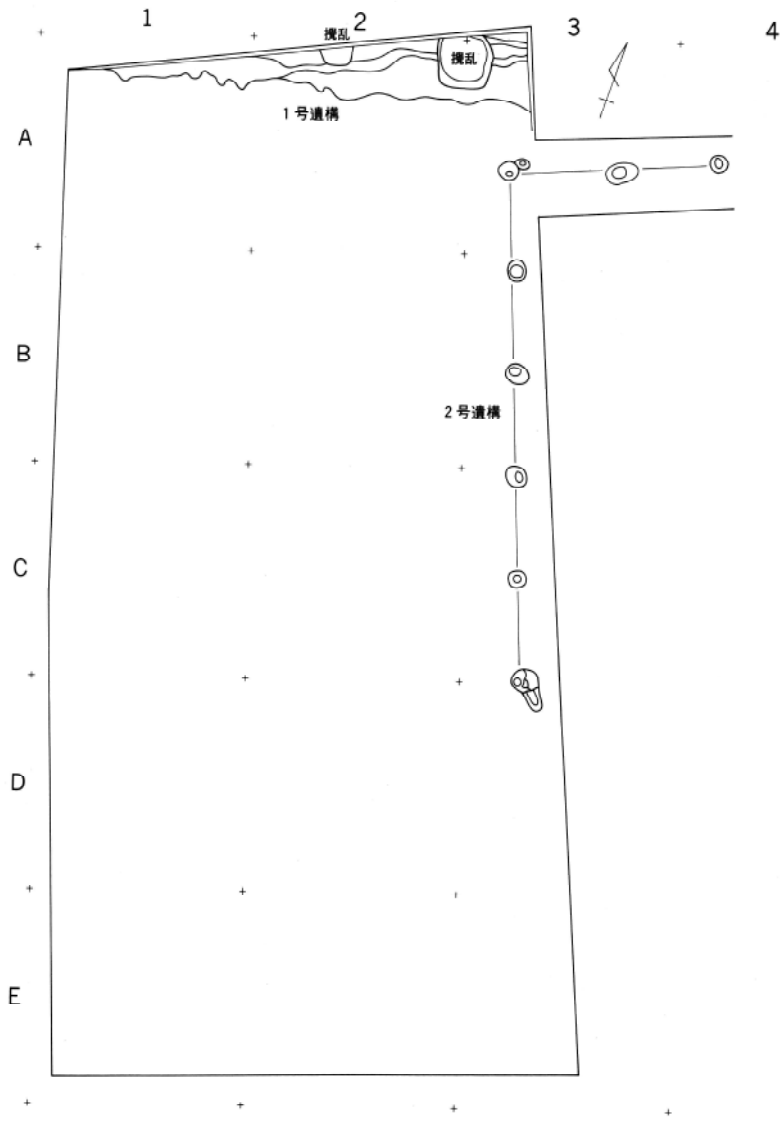
4　山ノ神台東

城下張出から南西に進むと山ノ神台東に至ります。標高は約49mで、北側斜面の下に広がる茶畑の地下には堀底が埋蔵されていると想定されます。試掘調査によって東端は土塁が残存していることが確認されています。2016年の試掘調査では、土塁頂部は犬走り状に硬化していました（山口2017）。

写真15　山ノ神台東　土塁（南から）

5　山ノ神台

山ノ神台東の東端から南西に進むと山ノ神台と呼ばれる高台があります。城下や北側一帯を見渡せる高台であることから、総構構築以前から小田原城にとって重要な場所であった可能性が指摘されています。発掘調査では16世紀以降の掘立柱建物跡（２号遺構）が検出され、立地から居住空間としての土地利用が考えにくいことから、この掘立柱建物跡は物見台に関連する建物と想定されています。調査区内で確認された柱穴の配置から５間×２間の総数14本の



第８図　山ノ神台検出掘立柱建物跡

柱で構成される建物と考えられます。柱穴間の距離は南北方向が1.9m、東西方向が1.95m間隔でした。確認面の標高は約64m、全体の規模は9.5m×3.9mです（山口ほか2003）。

6　小峯御鐘ノ台大堀切東堀

山ノ神台から道なりに南西へ進むと、史跡として保存され公開されている山ノ神堀切や稲荷森を経て、小峯御鐘ノ台大堀切（以下、大堀切）に至ります。大堀切東堀土塁頂部で標高約100mです。

東堀では発掘調査によって、堀障子、土橋、横矢折れが確認され、大堀切にも堀障子があることが明らかになりました。堀の幅は約25～30m、土塁頂部から堀底までの深さは約10mでした。中堀との間には小曲輪群があり、北条氏の縄張構成の特徴と指摘されています（諏訪間1996b）。曲輪群のうち曲輪３に相当する箇所で、2015年に試掘調査が行われ、堀の掘削に伴う搬出土が盛り土され、曲輪平坦面が造られていることが把握されました（山口2015）。

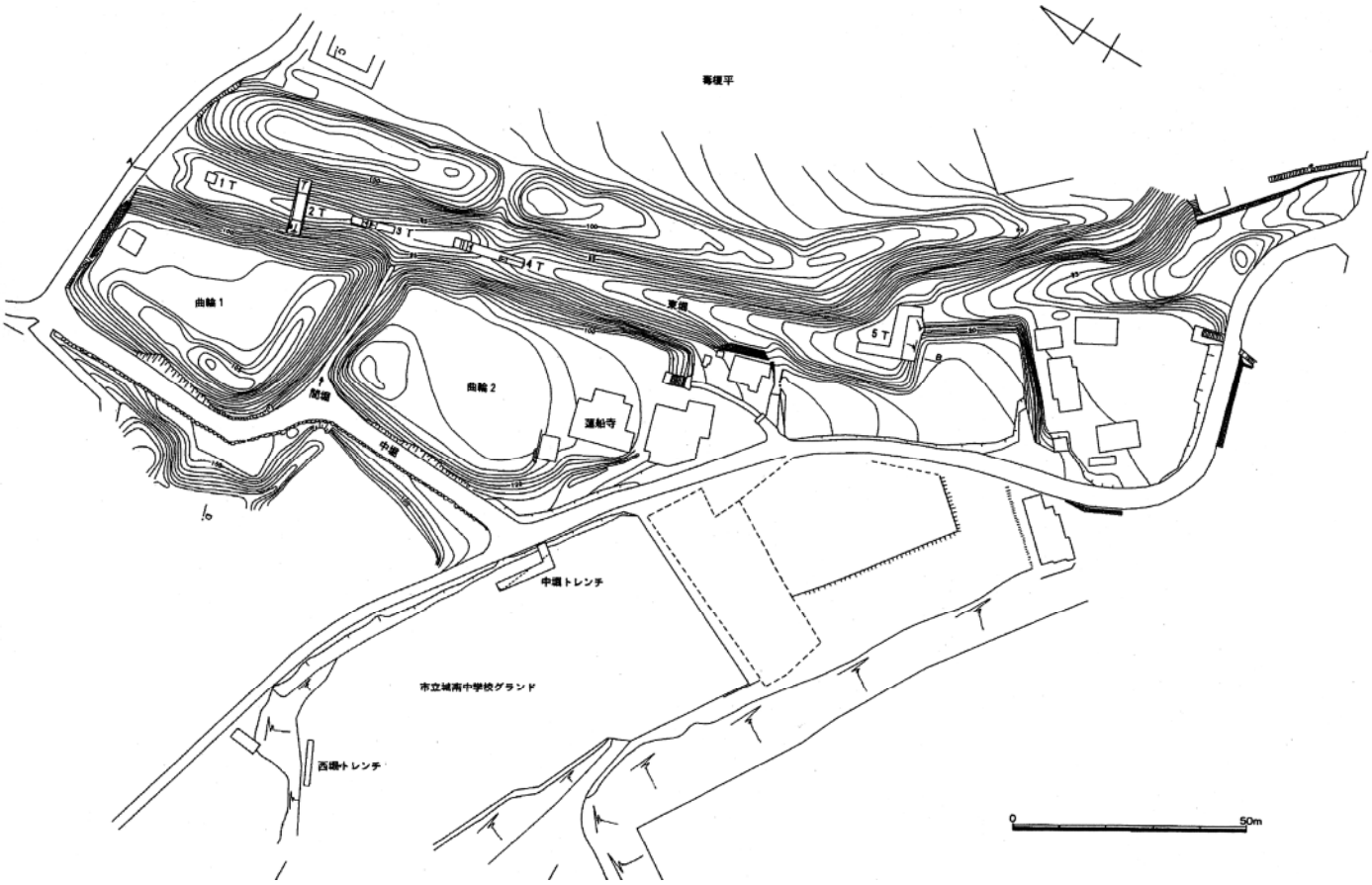
写真16　大堀切東堀　曲折部（北から）

写真17　大堀切東堀　堀障子（北から）

7　小峯御鐘ノ台大堀切中堀

中堀は立会調査によって、東へ屈曲する部分が確認されています（諏訪間1996a）。また、2009年に行った試掘調査では堀の東側法面と土塁が検出され、堀底は確認されていませんが、法面の勾配は40～45度でした（諏訪間2010a）。

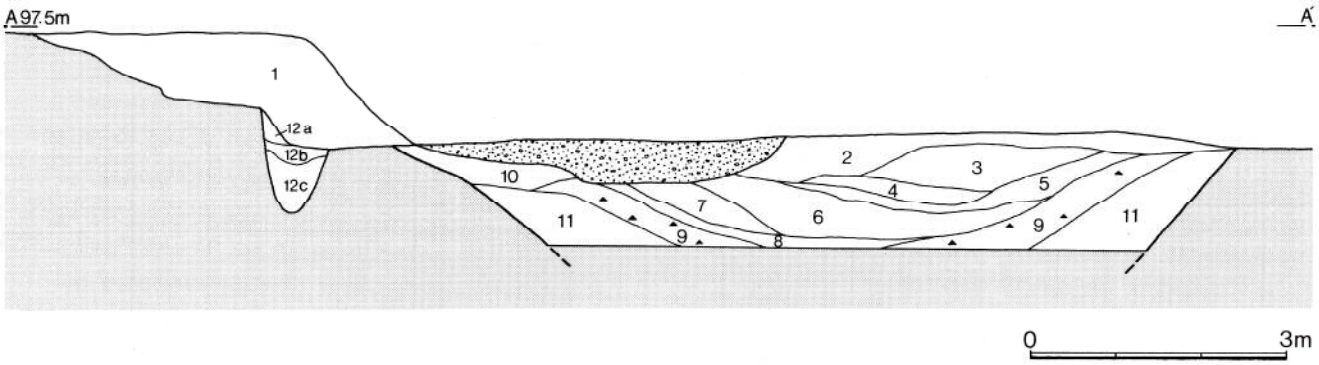
写真18　大堀切東堀　堀の堆積土層（北から）



第９図　大堀切東堀平面図

８　小峯御鐘ノ台大堀切西堀

大堀切西堀では市立城南中学校校庭内の立会調査が行われ、大堀切西堀である可能性が高い堀状遺構が確認されました。堀の東西際が確認されていませんが、堀障子をもつ堀と考えるのが妥当な状況でした（大島1996）。なお、発掘調査は多くありませんが、大堀切西堀はその多くが史跡指定され、公有地化された箇所が公開されており、その雄大な規模をいつでも体感することができます。



第10図　大堀切西堀第Ｉ地点堀状遺構

９　香林寺山西

大堀切西堀から小峯御鐘ノ台の中を西へ道なりに進むと、墓地があり、その南側斜面に香林寺山西の堀法面が展開しています。香林寺山西第Ⅱ地点の発掘調査では堀の幅が５ｍ以上あり、地表面から3.5ｍで堀底に達することが確認され、堀障子が検出されました。また、堀の南側には掻揚げがあり、ローム質土と黒色土が互層となっている状況が確認されました。調査地の東側には横矢掛や土塁が良好に残り、香林寺山西一帯は総構の中でも遺構の残りが非常に良好なものの一つと評価されています（諏訪間2010b）。

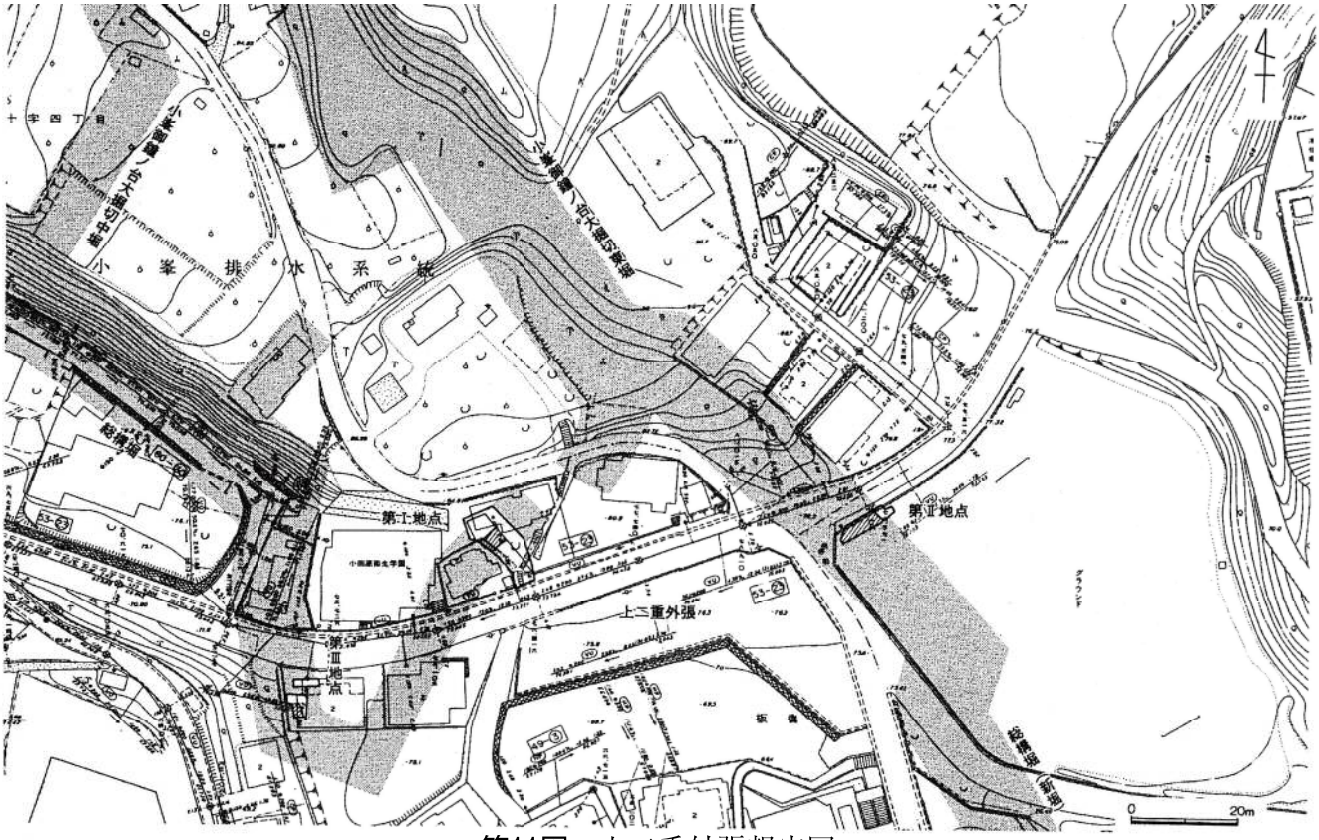
写真19　香林寺山西第Ⅰ地点　作業状況（北西から）

10　上二重外張

香林寺山西を左手に見ながら、更に西へ進むと小峯御鐘ノ台の先端部に至り、総構の外に出ます。総構の急峻な地形を左手に見ながら道なりに東へ進むと、虎口にあたる上二重外張に至ります。二重外張の構造をもつ虎口は総構西側に偏在しており、西から攻め寄る敵を強く意識したものと考えられます（大島慎一教示）。

上二重外張では３地点の調査が行われ総構の堀が検出されています。第Ⅰ地点の発掘調査では、後世の掘削が著しいものの、障子堀であることが確認されたほか、上端幅5.2ｍ、深さ4.1ｍの小規模な堀であることが確認され、法面の勾配は南東側が67度、

写真20　香林寺山西第Ⅱ地点　堀・掻揚げ（北から）



第11図　上二重外張想定図

北西側が61度でした。堀障子の立ち上がり角度は59度でした。堀確認面の標高は約79mでした。堀を埋める土の堆積状況からは、２度掘り直されていると推定され、掘り直しのたびに堀の規模が縮小し、虎口の機能が徐々に失われていったことが指摘されています（山口2001b）。

11　二重外張

上二重外張から南へ下っていくと、左手に三の丸外郭新堀土塁、三の丸外郭新堀が展開しています。更に進むと二重外張に至ります。新堀は二重外張付近から、三の丸方向へ延びていき、総構から外れていきます。二重外張第Ⅱ地点では堀や堀障子上の水路状施設が検出され、調査中、水の流れる様子が観察されました（土屋健作2020）。調査の結果、その姿は第12図のように想定されています。

写真21　二重外張第Ⅱ地点　障子堀（南東から）

第12図　二重外張イメージ図（土屋健作2020、画 市毛秀人）

写真22　二重外張第Ⅱ地点
堀障子上の水路状施設（南から）

12　伝肇寺西

二重外張から南へ下ると伝肇寺西に至ります。伝肇寺西第Ⅰ地点では総構の堀・土塁が一体的に調査されました。堀の両側法面が検出され、規模が明らかになったほか、堀障子が設けられた障子堀であることが確認されました。土塁は、平坦面を造り出した後に版築状に盛り土することで構築されていました。土塁の構造は南側の鉄砲矢場でも同様であることが確認されています。また、竜洞院裏第Ⅰ地点や上二重外張、香林寺山西第Ⅰ地点で確認された堀底の幅の約２倍である6.5mが堀底の幅であり、大規模な堀でした。これは小峯御鐘ノ台大堀切東堀などと同規模のものです。堀の上端で幅16.5m、土塁から底面までの深さ10mが計測されています（山口ほか2004）。

写真23　伝肇寺西第Ⅰ地点　障子堀（北から）

Ⅲ　低地部の総構の調査成果

1　総構早川口二重外張

伝肇寺西から南へ下ると鉄砲矢場を経て、板橋見附（いたばしみつけ）に至ります。板橋見附から南東へ向かうと早川口二重外張に至ります。早川口二重外張では、2017年の確認調査で円礫を積み上げ、版築状に盛り土をして土塁が構築されている状況が確認されたほか、外側の土塁内側、裾付近で砂利敷き硬化面を検出したほか、石組が検出されています（土屋了介2018）。浜町等の土塁が崩された際も円礫が多数出たと伝えられており、円礫を積み上げた構造は、低地部総構の特徴である可能性があります。

写真24　早川口二重外張　外側土塁（北東から）

2　滄浪閣土塁（そうろうかくどるい）

早川口二重外張から南東へ向かうと荒久に至り、荒久から北東へ向かうと御幸ノ浜西に至ります。御幸ノ浜西に位置する滄浪閣土塁は、発掘調査は行われていませんが、測量調査が実施され、蓮上院土塁（れんじょういんどるい）と類似することが指摘されています（小笠原2014）。

3　総構のその後

現在はその形が失われていますが、文久図（ぶんきゅうず）には低地部総構の展開する海岸に３箇所の台場が築かれた様子が描かれています（表紙写真）。これは嘉永（かえい）５年（1852）に外国船防備のために造営されたもので、江戸時代における改変です。絵図には現在は部分的にしか残っていない低地部総構も描かれており、江戸時代を通じて概ね維持されていたものと考えられます。海岸線の総構の絵図における表現は土塁のみとなっています。発掘調査の事例は少ないですが、今後の調査によって、低地部総構の実態が明らかにされることが期待されます。

写真25
早川口二重外張　外側土塁上の土層堆積（北から）

写真28
早川口二重外張
外側土塁上の石列及び土塁下の石組（南西から）

写真26
早川口二重外張　砂利敷き硬化面（南西から）

写真29
早川口二重外張　外側土塁下の積み石露出部（北から）

写真27
早川口二重外張　外側土塁構築土断面露出部（北東から）

写真30
早川口二重外張　内側法面積み石（南西から）

文　献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした主な文献を掲載しました。小田原城総構をさらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

小笠原清　2014「滄浪閣土塁の現況報告―小田原城総構海岸土塁と伊藤博文の小田原滄浪閣跡―」『小田原市郷土文化館研究報告』№50、小田原市郷土文化館

小笠原清　2015「『障子堀』甦って42年―北条技法と多様な様態事例―」『第32回全国城郭研究者セミナー』第32回全国城郭研究者セミナー実行委員会・中世城郭研究会

小田原市教育委員会　2010『史跡小田原城跡八幡山古郭・総構保存管理計画策定報告書』

大島慎一　1996「小峯御鐘ノ台大掘切　西堀第Ⅰ地点立会調査報告」『小田原城小峯御鐘ノ台大掘切』小田原市文化財調査報告書第60集、小田原市教育委員会

大島慎一　2001a「第３編　上二重外張第Ⅱ地点」『小田原城総構』小田原市文化財調査報告書第89集、小田原市教育委員会

大島慎一　2001b「第４編　上二重外張第Ⅲ地点」『小田原城総構』小田原市文化財調査報告書第89集、小田原市教育委員会

大島慎一　2001c「８.浜町二丁目125－3における遺跡範囲確認調査」『平成10年度遺跡範囲確認調査』小田原市文化財調査報告書第86集、小田原市教育委員会

大島慎一　2010「１.平成21年度小田原市内の発掘調査」『平成22年小田原市遺跡調査発表会　発表要旨』小田原市教育委員会

神奈川県教育委員会　1996『神奈川県埋蔵文化財調査報告』38

神奈川県教育委員会　1997『神奈川県埋蔵文化財調査報告』39

佐々木健策　2001 Ⅱ遺跡の立地と環境「第１編　上二重外張第Ⅰ地点」『小田原城総構』小田原市文化財調査報告書第89集、小田原市教育委員会

佐々木健策　2008「１.平成19年度小田原市内の発掘調査」『平成20年小田原市遺跡調査発表会　発表要旨』小田原市教育委員会

諏訪間順　1986「小田原城大外郭の調査」『埋蔵文化財発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書21集、小田原市教育委員会

諏訪間順　1988「小田原城大外郭」『小田原城三の丸・大外郭』小田原市文化財調査報告書23集、小田原市教育委員会

諏訪間順　1996a「小峯御鐘ノ台大掘切　中堀第Ⅰ地点立会調査報告」『小田原城小峯御鐘ノ台大掘切』小田原市文化財調査報告書第60集、小田原市教育委員会

諏訪間順　1996b「小峯御鐘ノ台大掘切　東堀第Ⅰ地点」『小田原城小峯御鐘ノ台大掘切』小田原市文化財調査報告書第60集、小田原市教育委員会

諏訪間順　1997「2　谷津山神遺跡第Ⅱ地点」『平成６年度小田原市緊急発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書第64集、小田原市教育委員会

諏訪間順　1998「3　小田原城総構　城下張出」『平成7年度小田原市緊急発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書第66集、小田原市教育委員会

諏訪間順　2000「4　城山一丁目31－33における遺跡範囲確認調査」『平成９年度遺跡範囲確認調査』小田原市文化財調査報告書第81集、小田原市教育委員会

諏訪間順　2004「9　十字四丁目1065－1外における試掘調査」『平成13年度試掘調査』小田原市文化財調査報告書第117集、小田原市教育委員会

諏訪間順　2005a「3　谷津字市屋敷227番８号における試掘調査」『平成14年度試掘調査(2)』小田原市文化財調査報告書第128集、小田原市教育委員会

諏訪間順　2005b「6　十字四丁目1073番7・24号における試掘調査」『平成14年度試掘調査(2)』小田原市文化財調査報告書第128集、小田原市教育委員会

諏訪間順　2007『小田原城総構　鉄砲矢場第Ⅰ地点』小田原市文化財調査報告書第144集、小田原市教育委員会

諏訪間順　2010a「11.小田原城小峯御鐘ノ台大堀切中堀第Ⅱ地点」『平成22年小田原市遺跡調査発表会　発表要旨』小田原市教育委員会

諏訪間順　2010b「10.小田原城総構香林寺山西第Ⅱ地点」『平成22年小田原市遺跡調査発表会　発表要旨』小田原市教育委員会

田代道彌ほか　1976『史跡小田原城址保存管理計画策定報告書』小田原市教育委員会

塚田順正　1995 第一節小田原城の考古学的調査の歩み「第二章　発掘調査の成果にみる小田原城」『小田原市史』別編　城郭、小田原市教育委員会

土屋健作　2020『小田原城総構二重外張第Ⅱ地点』小田原市文化財調査報告書第194集、小田原市教育委員会

土屋了介　2018「3.史跡小田原城跡総構早川口二重外張第１次調査」『平成30年小田原市遺跡調査発表会　発表要旨』小田原市教育委員会

山口剛志　2001a「第２編　一枚畠南第Ⅰ地点」『小田原城総構』小田原市文化財調査報告書第89集、小田原市教育委員会

山口剛志　2001b「第１編　上二重外張第Ⅰ地点」『小田原城総構』小田原市文化財調査報告書第89集、小田原市教育委員会

山口剛志ほか　2003『谷津山神遺跡第Ⅰ地点』小田原市文化財調査報告書第108集、小田原市教育委員会

山口剛志ほか　2004『小田原城総構　伝肇寺西第Ⅰ地点』小田原市文化財調査報告書第118集、小田原市教育委員会

山口剛志　2008『小田原城総構　鉄砲矢場第Ⅱ地点』小田原市文化財調査報告書第148集、小田原市教育委員会

山口剛志　2011「1.平成22年度小田原市内の発掘調査」『平成23年小田原市遺跡調査発表会　発表要旨』小田原市教育委員会
山口剛志　2015「1.平成26年度小田原市内の発掘調査」『平成27年小田原市遺跡調査発表会　発表要旨』小田原市教育委員会
山口剛志　2017「1.平成28年度小田原市内の発掘調査」『平成29年小田原市遺跡調査発表会　発表要旨』小田原市教育委員会

渡辺千尋　2014『小田原城総構　城下張出第Ⅴ地点』小田原市文化財調査報告書第170集、小田原市教育委員会

小田原の遺跡探訪シリーズ15
小田原城総構
―戦国時代最大級の城郭―
令和2年（2020年）2月20日　印刷
令和2年（2020年）2月28日　発行
編　集　小田原市教育委員会
発　行　〒250-8555　小田原市荻窪300番地
電　話　0465－33－1715
URL：http://www.city.odawara.kanagawa.jp
E-mail：bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp
印　刷　有限会社 石橋印刷